A13
4440
4

へ13
4440
4

キノ二
全傳

駿河舞巻之四

十勧　崖岷の白雪

良久しくして管法も終る頃、法堂に柴の戸をほとゝと音ものゝ慶とひゝ叩
き、雪の門に周章てゝ一個の尼きたりとゝ物ゝ言ふ声して何者ぞと問ふに
よろ〻遠しく戸敲打叩き光景いかゝと答もなきを遠き地元禄の頃人皆
ぞ都の名所恭しく皮方些方と見巡るうちふ思へざる今月の大雪原未土地
の案内もしらず。万望一夜の宿の法号化給中元為ふ無外をと願ふ。そして
罪を叩き罪を免させ給へやと侘る調を打演じ此庵に尼座半迄て。
申剋過ぎ来の戸閉堅く出入をとゞむるうち孤な男も一個其せて来
たれば一夜の宿を陳ら烟草の火も吐度とひ拾て入れとまると法ゝ押

とぞ。首に掛る袋より観音の霊像を取出し、遥刻より申せるを晩らば此仏こそ我が護身仏と崇めん為開眼を頼まさし。然て此の京都の今二度迄を見まじ朝夕の勤行に管絃を奏しゝを殊勝にぞある敬首申出主なき人なれ世に開眼頼まんとしうに彼の尼悦喜ましければ労賃は用無く候ぞと。紙に捨てるに薬一服を与へて戸を開き疾きを尼の出でぬ。二人ともまゐれるを越で低く秋もなく〳〵して件の尼大悲の像を請けて四肢も空に勝家は義笠を外面に捨て庵に入ぬ。程なく奥の一間より庵主と見へて過し年頃なる尼君は十七八の弟子尼と三十四十とも見ゆる尼何れも墨衣に花の帽子をして席に護身仏の開眼を望み給ふる旅客は何国の人にて在すやと。

修は勝家平伏なし、某は不知火の筑紫の奥の者なれば兼て皇都の神社仏閣諸を巡拝なし存念にて此度夫婦連にて都に参り寺院参詣を遂しに法輪寺の辺にて世捨人の大徳の在ますよし承り護身仏の開眼を願ひ申奉らん為此所へ来りし折しも管絃の音の殊勝さに此は庵主にぞと思ひ扉を叩く音もせず無礼も顧みず誠やかに述ければ末座に在し妙月尼此の像を持参し此仏を拝する紛なき尊き恵心の作なる事よ文も年久しく持伝へし殊勝なる尊仏も人の身中に守りけるぞ思ひ測り洞の裏に別に記念の尊仏を肌身を離

まだ命持ありしも菩薩佛の導にて母君住世にありせば廻り逢を得べし
らじ證拠となりたるも誰知りて紗月尼枯たる木にも花咲きて大慈
大悲の仏力なればこそ再び親と子の對面ならめと心信心なりし
と挨拶もせれば庵主の尼君去来仏間にて樂の用を開眼供養を始め
るに二個ともにともひさまされど生きる尼の中にも互に勝りて思はれし男
後をとひ參らせんとて休足なれば住荒し其の庵も今とる
は便なければ臨雪庵と号し深谷の奥の夜の雪も古へ人の跡
ならんと虫をなん宿りしと宣ひて方端に庫裡のなき家
さ、棚の端居に籠し置ける引連て入る所へ一個猫が如く
夜を身にまとひて其犬もなほ一人で尼姥自ら閨房より哀

苦盆を持ちて此侍久しう以て烟草ふかしもくゆらせなんど仏の
煙草の十悪五逆の眼もくらみし充満其頭の如清浄地を踏んで地
獄、餓鬼、畜生、修羅の此四種の苦患を解脱し吹かすなるは須羅林
栴檀の香を変じ三宝供養の請仰とまつて三十三天に薫じ渡され
日月を両の眼に入かへひて梵釈二天に手向もりまする仏の功徳に
此度を立たせても藻汐や畑を同じ鷲の峰、是山浄土にありべき仏に
結縁なりしまするは都の空の風情とぞ、見るに迄まで参けて追入道八億む
娘の尼果子楽伽を持ちて右近之助が慈勤に七十二八十四の窓は堪乳を知
に参ずて挨拶すれば世にを捨し姿に貌ね意衰も今やさらにうかく
せめて口に細らかなんとて背へ廻り抱つく待宗ある立退てあるも貞節

赤くめかぐらの雪の夜を紙屋かと思ひうたて墨染の衣で風流防人と
又もうつ波は神と霊を中をたきうつ[illegible]おれは仕る身をみて人の花とは海人
こがれをき波尼嘴まつと和さもいかう[illegible]殿中と知るかしこ[illegible]
んうつ意慕の雪小迷へる胸の雲霧[illegible]をの叶ひ大堰の川
よ月を沈む手書の側のみの泥と消るそんなかう浪をを[illegible]
いなせんたつ半ひ捨くもあるんとする伝説を絵くまとこ[illegible]
むる歌して紛んと扱ものを紀やじを留るを中の風ふつとさわく[illegible]
だらく袴を紀掃ものを墨流の[illegible]をあるをの辛を拭て下を拝祇の大
振袖帽を引くれを切ものを[illegible]金谷仙樹の[illegible]
の色瑤池の桂の姿の月と見うり寸寸俗は二個が作夫仏るの方う

声うく管領細川勝元が金覆尼右近之助待家[illegible]変ふうと
亮隔尼友押ひ[illegible]の尼最優然を。将の上中ひ
尼ふん金ふる二個の女室町中の屋風ふ[illegible]
関ふるゲーうう尼ふ区声うう[illegible]右近之助を始ぬ[illegible]
も金ーふ[illegible]ん[illegible]を[illegible]武林[illegible]
兄准三ふ尼馬伏行夫納言[illegible]親ふの書ぬ[illegible]の方ふハ勝ふう[illegible]
[illegible]紙ふ世紙去のひ尼靖国紙行御ふ偽うて此屋宅ふ[illegible]
ぐく四海の安尼紙斗巳も是皆巳文の中巳言又ふ[illegible]姫ふ
其方ふ結髪有ー山名宗全が女ふ津姫ふ中て再び[illegible]
個を紙紙ふ金て紙も好ふう人居る

嵯峨の雪

十一齣　記念の冥佛

爰に又りや宣まへり。細川山名は足利家の両執権職にして雙へ
鳥の翅のごとくなるが、宗全が女天津姫は細川右近之助に配せ。
聟舅の間がらびにて、民を撫道四海を治めさせん事を望み
けるに両家の骨肉情が深く結納の取かはしも既に言根を結び
の角の争ひも終に入道宗全が西の陣に東を攻ずるも同級なれば寸討
死すべき世に係りるを、天津姫は持家が産て日頃の細思ひ
をかけ寸まで妃が如何に家を出やう家に生れつきぬと人質は思
花の帽子が墨の衣に身をやつさせ給ひて世も何となくして去逃
之助は己がまつの忌根は忠義にかへ持家は山名の家名を起

させて、室町将軍を守護なさば、足利の代も武家の繁栄も
久しき天津姫と婚姻なさば二個の侍女も諸共に頼みて進むを
どこ右近之介ハ心ならずむさぼる縁組を思ひ備ゑのならず
しる遠からず主ある植木の身を中んで打遠ひて忠義の道を
る漢情の西存寺を出で氣色かくして入る所を捨君出で御家
に向ひて只終に川竹の流に捨て身の苦界をめぐらせ給ひし
けれども御妻の命日絵の身をあまりしかども悲運あらずして
かくの億偉なる臣も多く集まる道なく此の度の篇を見て再び
業行の事を取りて上に向けてや姫君を世に出し果して右近之
助は女を剃して将を求むるが一人の女子を迷ひ四海の安危家の興廃

頼之ほんやく入道宗全が息女天津姫と婚姻御むすびありて足利
家四代の重宝たる宝寿丸源雷丸の銘刀細川山名の家に傳て
二振の銘刀は両家へ別ちて預り守護せしが
終に山名が預りし源雷丸を奪はれまさかに近方
より宝寿丸も失ひ盗賊を捜す所の有ん入道宗全細川を恨み
慎しきや殺官を得主ども千弥治うき事なれば先錦之が秘藏近
川が宝寿丸を盗み是は宗全が悪心にて二振とも手に入んとて
奪ひあるよし是御家の根の事を思へば怪しき説ありけれど
奥御沙汰もなく又将軍より御返しの銘刀失せしを仰
遂に宝剣を御手に入つく今御身に及び山名家

を攻んとするに二振の銘の在所を知ずんば
知れば是て右の銘刀に添て一寸付ず天津姫が婚姻を調へざる勇
士の言葉を甘く切く言放せば今は是迄とや思ひけん姫は懐剣を抜
院に自害をなさんとする處一個の女房が縋り制しとどめく妙月尼
尼と名乗し其の女人は向ひて只今の心を知りますれば注意を
をも修しかずまもいおはずから別室へ伴ひ入りけり
の端に尼は右近を介も肖京今は手ひ伴よう覚ゆ
捨て尼ぞ尼と侍女とつき仏事をして入るも侍房へ伴ひ
て女房は女房の心を知り世の常言も知りへ立ち
持し比時に細川が家臣神申良三八度に仕へて夜といふ者

和泉が十七年の春三月どの彼れの御仏なる情を胚胎して産とせし女子和泉が千自く亜吉仇木とのく紀世音の流身仏流転して和泉が身に支へる山名家まで奉仕なれども血統一個見えず、義長つぐ成りしを知らず目にも知らず、薬師寺の三八家も御長つぐの四級落人なれども、尚も姫が身の上の吉凶を道とせしも、御儒つるぶ四ひも寺子ん行る寅年の紀世音仏開眼法ひを有るを一所の高位者の空言を推察きて、四人身の三八家の見安して姉妹が妻ふ義子ふ於ものるやとぜよう世を去る後は月の和歌ゝ押りせうく無る後嗣ゝ洞の月紀押

撰ひ、現在紀ものの名を名ふるゝ。襁褓の裏より他人流ゝ十七年の今日まで。命を見てるもの紀毎ゝ初くの部面を知ゝ紀邪紀ゝ。過刻より知らるゝ毎ゝ二世を契り指ものゝ。下津死の婆姻を結ものゝ。つとも身を理本のまゝで。柿黒紀ゝいうゝ世人ゝ身も自安の道ゝ有ゝ。紀も在人流ゝ山名の家も再興ゝ。尼の仁心を命ゝ三方四方の家紀を立て弁ひ立ゝ。紀ゝ物ゝる情風を選ゝ月取ゝ突ゝ仏ゝ流ゝ身を問ひ程ゝ過ゝ文ゝ。宝ゝ紀ゝ。神門ゝ山名の恨と散ゝ。紀の婆姻を結ひ寅年ゝ紀ゝ。現在の家ゝ紀粗雑ゝ毎ゝ所存の一通ゝ申ゝ異ゝ

庵主
天津妃
清空

千枝
勝家

〽夫れ家を治むる人はやゝもすれば武術を常とし武様を放さぬ故に二振の
宝剣は両家同様に治まりて四海を望む悪人の手に入る時は天下の乱れ細
川家より山名を難じ宗全が家を滅さんとあやしみて我が任
の一礼とぞ山名の一族は我に及ぶ首尾の首級を無事にて返さんと
時を失ひ宝剣を取り得ず細川山名両家を和睦させんと謀
三人の御家の種をも失はんとて様子を窺ひ心を労し
剣を流れに武林宗所家に仕へる女の本性を顕はさんとする
勇と忠の終

十二齣　貞操の自殺

宝剣を母の網にかけ家の一家ごとに言ひ遣すべし細川家の重宝を奪ひ返す事

び武士がみだりに其の手を討つ事は八ッ時に命を捨むべき母の勘気を
さらに恨むも洞と隔たれど角を男にて宝剣を取り戻し勝元山名家に仕へ
つる時宝剣を盗み取りて武林宗全の宝剣を奪はんとて武様は
始めより細川家へ仕へて文武を以て桂花丸といふ人の武術の為に主の為
直仁の乱れに成りて山名家に亡くなりしが廉直桂花丸の名代として北川宗右衛門
と名乗りて此の家に住んで思ひを遂げんと其の中に及び研人
となりて当家の為に宝剣を尋ね山名家と両振の宝剣を
盗み取りしを知りたる細川家へと入道殿宗全の
細川家の威勢を見て有信ありしが天津妃に二振を盗ませ
と婿洞と山名家が再興せんと両家の家人を宝所殿の中に為さんと

四海万民の為ものを思ひ分け給ふ事なれば、彼方の婚姻調ひて
充ある時は、徒花馬鹿に成る様もあらじ。八百の帰系も叶ひ
ぬるの方なれば、中納言殿、家の為に成るべき事なれば、
丹右衛門殿の娘、浦花の聖、明神の家も、あらまほしき
様にしるべし。自分の方に、天上の恵みと、蔭て、神系の秘花
なれば、無双の、親族、具る中にて、ひとりも一命を捨てんと
いふ者、二心なく、未来の為も、法の道、世間
俗世の二面、二世の契りは、まことの二世、限る、又上無君なる、
十五の、後、家中を知らざれば、第紀なる母も、尚、常に、行末も、知れ
ず、分の上に成、第人、そこの男ひいた井、河、水、流れ、

ぬ。是、更に、春雨の、降りしも、庭の雫、人、涙、命、なく。
多くの人、なる、様、多、夕の、の、仮、も、ぬ、ぬ、恨、し。
無、無、なる、なる、なる、なる、物、色、で、で、の、の、和、ま、さ、れ、な、な、
院、な、か、ま、と、人、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、
て、人、第、名、一、個、の、能、人、な、神、の、あ、な、な、な、な、な、な、な、な、
自、長、様、花、恵、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、
や、き、馬、ど、の、山、名、家、の、滅、亡、知、を、な、な、な、な、な、な、な、な、
同、紋、ど、く、く、郎、北、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、
や、こ、と、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、
上、な、紋、な、の、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、な、

せつ毛。妃紀かまひ給ひしが仁の心ざし
拙ふ。今是をうる頃の級害なり四方を
咎むべき様なし。四海見て
従ふのみ。国ふるべき者執権
身のよし。函支なく海を世
よつてうつ。よもの年方者して
は支給うつ。城者ちの
松入道源秋。今は
又は者ゝ強勇みて。今東海道は

曲をの数多の法学をかうしひて。宗所厚ようりんとせ
ゝ方ゝ。ぬ四海の大支。ま更人法を
由を。吹ゝの吉奉ゝ山名家の
存。然ゝ赤松満祐。今の名紀
てゝ。ゝ入道宗全
とゝ。細川の名
ゝ祐。ゝ富士九
山名家の
ゝて。首は
赤松。墨宅

もはやかゝる所に二十ばかりは年恰好なる女の行をバ刃を引かけて
て連理の枝に比翼を結びて紀楚尓に沈めらんとせん為先方違をて
うかゞふ折しも今宵此御座敷のうちより草陰のうちに女の泣声
不審しく外面に立出て流し見れば四阿の中に神米良二八
どの某女と申すは、年頃のまゝなるは、是佐倉(?)に思ふが由へ、我宛
詔るとてまゐらせし、浮名のものと伴ひて、平鹿姫と縁せんに、究
竟の手段して寒星丸の奴に入て、神米良之八どの切に立
廻し、兄尾郷蔵(?)にて、物語る、娘のお清(?)との貞操(?)より
手に聞へがりて実をまて、我が何天下(?)に及ぶ(?)まじき身を
ひそりか此方の詞にて姫君の御身に悪る一念ども

犬死せし縁者やと耳に聞えし若き記息をつぎつゝ
まかりやらんの御詞ども、なんぞ生害を夫死とはいへるや、此世に
浮て川竹の流れの身となり果ても、天道の恵みや、多くの人に
肌をまかせず、流弄の初より、右近之介に別れし後、貞操を守る
常磐木の、松の位の高き身とのがれ、武門に宮仕して女の浮汚
と思へども、恥ある人に馴染れ身かけしとて、勘気を蒙りし也。
是皆我身のなせる事なれば、兄君の御心を知らざるにはあらねど、いつ
かる辛苦もいとはねども、此君に操を貞女が捨、猶楽山とやらんへ
由えよりて、涼よくお果らん、家来共に情のかゝれど、何か情まんと縁の身
の流れはかられ浮世を捨、冥途の旅に赴く身なれど、犬死ならずし

あらず。揉まる娘なれども猶孝まつ世母に数種さんの心の
尤も是なり。叙れて謝す

十之齣　恩愛の節義

しつの身に加ハ吾が父、実父神谷良之八ハ、好色の為に家を傾けて
思ひ寸一旦ひろく横死なしぬ貞節が父ぞとて見定しと。
つかて彦八へ入る尤隠ろに様にま向ひ。ついに来の孫好しく。
娘おせきが健気の孝行。不便と見ゆる洞察がんば貞の情まに
云ますて世の中に浅はかにして家を殺るに世するの斎子人を限り
志ても此でさせ中ても、ある親子なおじ縁のものも又まかりさや豈
織のあるに漂の身と膝行か吾の子延病迫りけ。利害女を

斯かる御衛に揉娘は若気に浅しく孝心貞女の一念より行て。不
日に眼病平癒せし思へ。親の於家に本国ね為で。又仇本を一子之
松が行方尋ねよと。何国定めぬ旅のそへ出かけしが西脇
の折に偶ふて。拗ざまくハきつける事ぞ。亭子のにて逢ふんと。思ふ
が甘あて力艸それまて引かへ吾子ハ孝心深き看覚が容ちなうき
胸をとみるにハ、いとある色若の周縁なるん。世の中に老いぬやきの
みてもがなに代りくれる親心にしかせんずつる出しひろ壊ち思ひ
乃まべきさら。我身も折から手方の命を今日につがまし。其の細
とかくれハ、我が自ら出せんと思ひ折うし。われのゆきにか生君哉
叙福元雲の後会も右近之助搖れの西岸の極君に魂を奉

恩愛の義節
北川宗左エ門

千枝
清空

いまのひいき男に教坊の風俗を継ぎたるハ、心にかなひて娘の輪
舞なとをなぎ、是も文人ゆへ遊びせぬへからず。それにあらバ世を捨たる身の不
如意なる男と云ひ、弄斎節もあれバなりとも、心よき曲中に弛緩き。
女児なれも当面を見ず、いよいよ世上の風俗ハあそびならバ、動気を
養ふ才なれども猶更あはれ、此係言にもん為なるに
強く猶更のことは此奥に文治中に進りをなし世へ此え
あり才家の何人だ、宮所殿のゆきはなまし猶更さのいろ
も此ぬ花さなて曲中を初しるて両君の摂動あれるさなる
ずいぶんよく手ある恩愛の十方にも心ろ、女児の才もいかゞ
あれきんと書くらるも、其其有と尋るから、新子の有縁なるぞ

して、今係の姿が一目見て心移りこすがすら方子する上ならば。
猶更でのことは下方奥ハ重々会に操て俄なさで、原来仁義なる猪
えしよも出来いふもこれをすじ尤も女児が貞操も
立文をおもむき立させる家之文書のなれきて、親をたは生まれ積り
しかるはいで幸知らぬ、宮の中なる梅の香がれ心の出きせ。
おるは積画冊を枝之八が膂力お稼より早く、是も又嗣つゆう
ぬばたまの二個の勇士もあるあらバ子の数ハ娘の身は揃ひも又連
までの記念をそいふ人重さる護身に太極の縁の語り花がなるを
如かる宝経もさせすじもの。是や漢ま世言の例をめのをて地獄に
冥因縁わきさ身なるに、例は根に世はなくら、是を擬るが毎

が知れぬ清き白粉ぬりたるのみにあらず、紅白粉
もかつ、実の母上きつと寺中へ参せて、百日ゆう、姓後仏を
教ゆる色、移りしいまだ寺中へ参せて、おさんを未だ寺の咲
ぬる人絵ありと。たぶらかす無上も、生き写しにいかるべきせは
其命を九ゆる絵屏ひてをゆくゆくと恨むも母の力をそ
なんとをもて、ふつゝと、ふつゝ迷ひの書べべ時雨
西の空ぬるる月絵をゝべて、極楽浄土まるつき、浄瑠璃仏
ならぬ法て、ゆくも尼の姿と成、明日を名ゆ、寺の法
号をつゝ、ゆそ名ゆ、新寺をゆ、ゆゆ、寺を新をゆ
打つをを、ゆの世はをゝ、をの竜を眠るゝ、ゆ往生を祈

を細の衣をの枝のかゝ寺の雪あるもゆゆのゝを告ゆゆ、ゆゆ
む寺をの、ゆををゝをゝをゆる寺を